

1 はじめに

信頼性工学 (reliability engineering) を学習する.

時間変数を $\mathbb{R}_+ := \{t \in \mathbb{R} \mid t \geq 0\}$ の範囲で考える. \mathbb{R}_+ 上の非負の可積分関数 $f(t)$ で, 積分

$$\int_0^\infty f(t) dt = 1$$

を満たすものを**故障密度関数** (一般に確率密度関数) と呼ぶ. 時刻 t までに壊れる確率

$$P(t) = \int_0^t f(s) ds$$

を**故障率**と呼ぶ. 故障率 $P(t)$ の微分が故障密度関数であるつまり, $f(t) = P'(t)$. 時刻 t まで, 故障していない確率 (故障率 $P(t)$ の余事象)

$$R(t) = 1 - P(t) = 1 - \int_0^t f(t) dt$$

を**信頼度関数**と呼ぶ.

故障密度関数の期待値 (平均値)

$$E[f] = \int_0^\infty t f(t) dt$$

が計算できるときこの期待値を**平均寿命**と呼ぶ.

平均寿命が計算できるとき, 次の定理が成立する.

定理 1.1. 平均寿命は, 信頼度関数を積分すれば求まる.

$$E[f] = \int_0^\infty R(t) dt.$$

時間 $T > 0$ まで生き残った品物の平均寿命を**残り平均寿命**という. 図1から分かるように, この場合の故障密度関数 $g(t)$ は,

$$g(t) = \alpha f(t+T)$$

である. ただし, 定数 $\alpha \geq 1$ は,

$$\int_0^\infty g(t) dt = \alpha \int_0^\infty f(t+T) dt = \alpha \int_T^\infty f(t) dt = 1$$

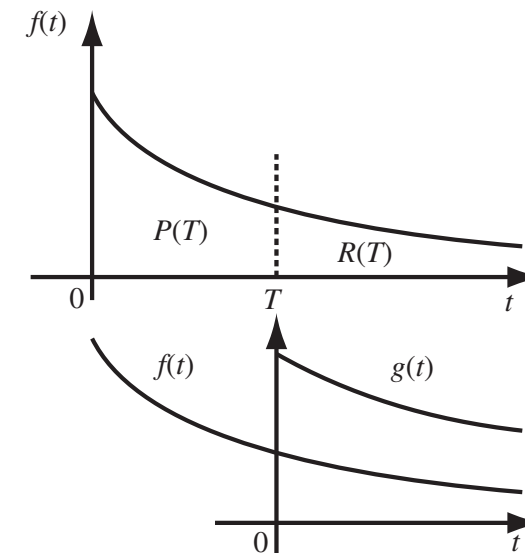


図1: 時刻 T まで生きた後の故障密度関数 $g(t)$.

を満たすように取る. つまり, 新しい故障密度関数 $g(t)$ は,

$$g(t) = \frac{f(t+T)}{\int_0^\infty f(t+T) dt}$$

で与えられ, 残り平均寿命は, 次式で与えられる.

$$\int_0^\infty t g(t) dt = \text{残り平均寿命.}$$

もし, 信頼度関数 $R(t)$ が求まっているなら, 新しい故障密度関数 $g(t)$ の分母は,

$$\int_0^\infty f(t+T) dt = \int_T^\infty f(t) dt = \int_0^\infty f(t) dt - \int_0^T f(t) dt = 1 - P(T) = R(T).$$

1.1 分布関数

有名な故障密度関数 (一般に**確率分布関数**と呼ぶ) とその特徴をあげておく.

1.1.1 指数分布

平均寿命と任意の T まで生き残った製品の残り平均寿命が等しくなる分布である. 正定数 $\lambda > 0$ に対して, 信頼度関数が

$$R(t) = e^{-\lambda t}$$

与えられる分布を**指数分布**と呼ぶ。故障率 $P(t) = 1 - R(t) = 1 - e^{-\lambda t}$ を微分すると故障密度関数 $f(t)$ がえられるので、

$$f(t) = P'(t) = (1 - R(t))' = -R'(t) = \lambda e^{-\lambda t}.$$

定理 1.1 を用いて平均寿命を計算すると、

$$E[f] = \int_0^\infty R(t) dt = \int_0^\infty e^{-\lambda t} dt = \left[\frac{1}{-\lambda} e^{-\lambda t} \right]_0^\infty = \frac{1}{\lambda}.$$

時刻 T まで生き残った製品の故障密度関数は、

$$g(t) = \frac{f(t+T)}{\int_0^\infty f(t+T) dt} = \frac{f(t+T)}{R(T)} = \frac{\lambda e^{-\lambda(t+T)}}{e^{-\lambda T}} = \lambda e^{-\lambda t} = f(t)$$

与えられる。つまり、 $g(t) = f(t)$ であるから、残り平均寿命は、平均寿命と等しくなる。

1.1.2 ガンマ分布

ガンマ関数 $\Gamma(x)$ を用いた分布関数である。

定義 1.2. $x > 0$ に対して、**ガンマ関数** $\Gamma(x)$ を積分

$$\Gamma(x) = \int_0^\infty e^{-s} s^{x-1} ds$$

で定義する。

ガンマ関数は非負整数 n の階乗 $n!$ を正の実数へ拡張した関数であり、以下の性質を満たす。

1. $x > 0$ に対して $\Gamma(x+1) = x\Gamma(x)$ である。
2. $\Gamma(1) = 1$ である。
3. 自然数 n に対して、 $\Gamma(n+1) = n!$ である。
4. $\Gamma(1/2) = \sqrt{\pi}$ である。

定義 1.3. $C > 0, \alpha > 0, \beta > 0$ を定数とすると、故障密度関数 $f(t), t > 0$ を

$$f(t) = C t^{\alpha-1} e^{-\beta t}$$

と取った分布を**ガンマ分布**と言う。定数 $C > 0$ は、 $C = \frac{\beta^\alpha}{\Gamma(\alpha)}$ である。

定数 $C > 0$ は、 $\int_0^\infty f(t) dt = 1$ を満たすように選ぶ必要がある。つまり、

$$\begin{aligned} 1 &= \int_0^\infty f(t) dt = C \int_0^\infty t^{\alpha-1} e^{-\beta t} dt = C \int_0^\infty \left(\frac{s}{\beta}\right)^{\alpha-1} e^{-s} \frac{ds}{\beta} \\ &= \frac{C}{\beta^\alpha} \int_0^\infty s^{\alpha-1} e^{-s} ds = \frac{C}{\beta^\alpha} \Gamma(\alpha) \end{aligned}$$

ただし、 $s = \beta t$ と変数変換 ($ds = \beta dt$, 積分範囲は変わらず) した。したがって、 $C = \frac{\beta^\alpha}{\Gamma(\alpha)}$ である。

パラメータ α, β を変更したときのガンマ分布の故障密度関数は、図 2 である。

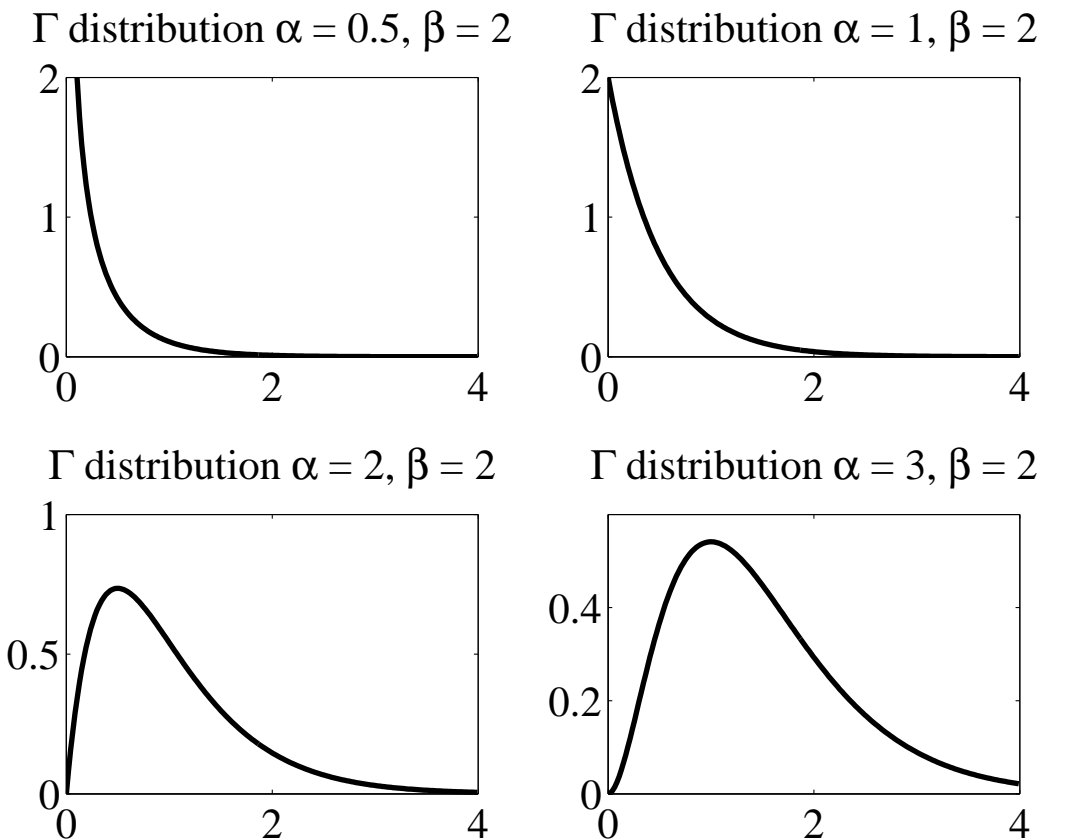


図 2: ガンマ分布の故障密度関数. $\alpha = 0.5, 1, 2, 3, \beta = 2$.

ガンマ分布の平均寿命を求めよう.

$$\begin{aligned} E[f] &= \int_0^\infty t f(t) dt = C \int_0^\infty t t^{\alpha-1} e^{-\beta t} dt = C \int_0^\infty t^\alpha e^{-\beta t} dt \\ &= C \int_0^\infty \left(\frac{s}{\beta}\right)^\alpha e^{-s} \frac{ds}{\beta} = C \frac{1}{\beta^{\alpha+1}} \int_0^\infty s^\alpha e^{-s} ds = C \frac{1}{\beta^{\alpha+1}} \Gamma(\alpha+1) \\ &= \frac{\beta^\alpha}{\Gamma(\alpha)} \frac{1}{\beta^{\alpha+1}} \Gamma(\alpha+1) = \frac{\beta^\alpha}{\Gamma(\alpha)} \frac{1}{\beta^{\alpha+1}} \alpha \Gamma(\alpha) = \frac{\alpha}{\beta} \end{aligned}$$

ただし, $s = \beta t$ と変数変換 ($ds = \beta dt$, 積分範囲は変わらず) した. ガンマ関数の性質 1. より, $\Gamma(x+1) = x\Gamma(x)$ であることを使った.

1.1.3 ワイブル分布

定義 1.4. $c > 0, \alpha > 0$ を定数として, 時刻 $t > 0$ での故障率 $P(t)$ と信頼度 $R(t)$ が

$$P(t) = 1 - e^{-ct^\alpha}, R(t) = e^{-ct^\alpha}$$

で与えられる分布をワイブル分布 (Weibull distribution) とよぶ.

ワイブル分布の故障密度関数 $f(t)$ は,

$$f(t) = \frac{d}{dt} P(t) = c\alpha t^{\alpha-1} e^{-ct^\alpha}$$

である.

パラメータ $c > 0, \alpha > 0$ を変更したときの故障密度関数を図 3 にのせる.

ワイブル分布の平均寿命は,

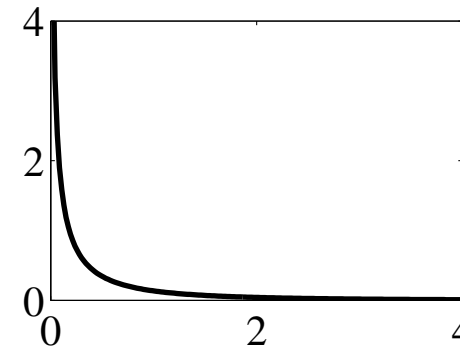
$$E[f] = \int_0^\infty t f(t) dt = \int_0^\infty t c\alpha t^{\alpha-1} e^{-ct^\alpha} dt = \int_0^\infty t e^{-ct^\alpha} c\alpha t^{\alpha-1} dt$$

ここで, $s = ct^\alpha$ と変数変換すると, $t = (s/c)^{1/\alpha}$ で, 積分範囲は $(0, +\infty)$ で変わらず, $ds = c\alpha t^{\alpha-1} dt$ である. よって,

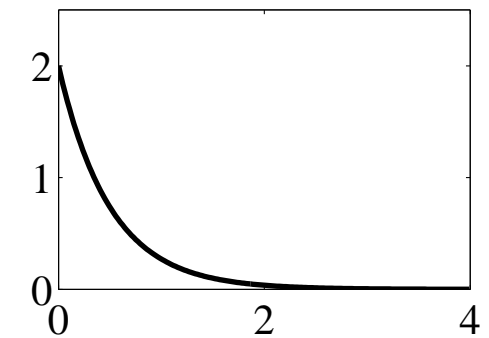
$$\begin{aligned} E[f] &= \int_0^\infty (s/c)^{1/\alpha} e^{-s} ds = \left(\frac{1}{c}\right)^{1/\alpha} \int_0^\infty s^{1/\alpha} e^{-s} ds \\ &= \left(\frac{1}{c}\right)^{1/\alpha} \int_0^\infty s^{(1/\alpha+1)-1} e^{-s} ds = \left(\frac{1}{c}\right)^{1/\alpha} \Gamma\left(\frac{1}{\alpha} + 1\right) \end{aligned}$$

を得る.

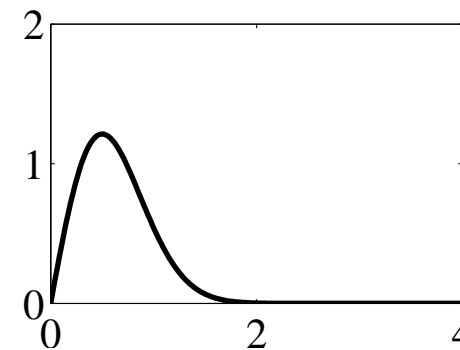
Weibull dist., $\alpha = 0.5, c = 2$



Weibull dist., $\alpha = 1, c = 2$



Weibull dist., $\alpha = 2, c = 2$



Weibull dist., $\alpha = 4, c = 2$

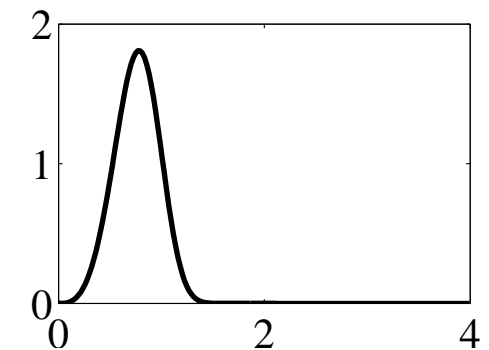


図 3: ワイブル分布の故障密度関数. $\alpha = 0.5, 1, 2, 4, c = 2$.

2 直列接続と並列接続

信頼度が $R_1(t), R_2(t), \dots, R_N(t)$ で与えられる N 個の部品を適当に組み合わせたシステムの信頼度 $R(t)$ を計算しよう. 特に直列接続と並列接続が重要である.

2.1 直列接続

図 4 は, 信頼度 $R_1(t)$ と $R_2(t)$ の部品を直列に繋いだ場合である. 各部品の故障率は $P_1(t) = 1 - R_1(t), P_2(t) = 1 - R_2(t)$ である. 直列接続の場合は, システム全体が生きているためには, 両方の部品が生きている必要がある. したがって, システム全体の信頼度 $R(t)$ は各部品の信頼度の積である.

$$R(t) = R_1(t)R_2(t).$$

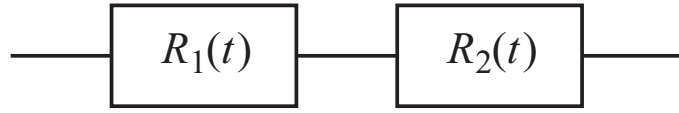


図 4: 直列接続.

このとき、システム全体の故障率 $P(t)$ は、

$$\begin{aligned} P(t) &= 1 - R(t) = 1 - R_1(t)R_2(t) = 1 - (1 - P_1(t))(1 - P_2(t)) \\ &= P_1(t) + P_2(t) - P_1(t)P_2(t) \end{aligned}$$

である。 $P(t)$ を微分すると、システム全体の故障密度関数 $f(t)$ が得られる。ただし、各部件の故障密度関数を $f_1(t) = \frac{d}{dt}P_1(t)$, $f_2(t) = \frac{d}{dt}P_2(t)$ とする。

$$\begin{aligned} f(t) &= \frac{d}{dt}P(t) = \frac{d}{dt}(P_1(t) + P_2(t) - P_1(t)P_2(t)) \\ &= \frac{d}{dt}P_1(t) + \frac{d}{dt}P_2(t) - \left(P_2(t)\frac{d}{dt}P_1(t) + P_1(t)\frac{d}{dt}P_2(t) \right) \\ &= f_1(t) + f_2(t) - f_1(t)P_2(t) - f_2(t)P_1(t) = f_1(t)(1 - P_2(t)) + f_2(t)(1 - P_1(t)) \\ &= f_1(t)R_2(t) + f_2(t)R_1(t). \end{aligned}$$

直列接続した場合の故障率、信頼度、故障密度関数は、各部件の故障率、信頼度、密度関数が対称に入っている（添え字 1, 2 を取り替えても式は変わらない）ので、直列接続する順序によらない。

2.2 並列接続

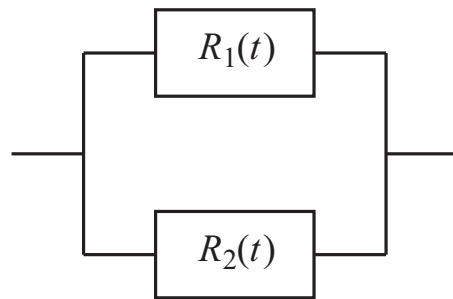


図 5: 並列接続.

図 5 は、信頼度 $R_1(t)$ と $R_2(t)$ の部品を並列に繋いだ場合である。各部件の故障率は $P_1(t) = 1 - R_1(t)$, $P_2(t) = 1 - R_2(t)$ である。並列接続の場合は、両方の部品が同時に壊れていないかぎり、システムは生きている。したがって、システム全体の故障率 $P(t)$ は、各部件の故障率の積で与えられる。

$$P(t) = P_1(t)P_2(t).$$

システム全体の信頼度 $R(t)$ は、

$$\begin{aligned} R(t) &= 1 - P(t) = 1 - P_1(t)P_2(t) = 1 - (1 - R_1(t))(1 - R_2(t)) \\ &= R_1(t) + R_2(t) - R_1(t)R_2(t) \end{aligned}$$

である。各部件の故障密度関数を $f_1(t) = \frac{d}{dt}P_1(t)$, $f_2(t) = \frac{d}{dt}P_2(t)$ とすると、システム全体の故障密度関数 $f(t)$ は、

$$\begin{aligned} f(t) &= \frac{d}{dt}P(t) = \frac{d}{dt}(P_1(t)P_2(t)) = P_2(t)\frac{d}{dt}P_1(t) + P_1(t)\frac{d}{dt}P_2(t) \\ &= f_1(t)P_2(t) + f_2(t)P_1(t) \end{aligned}$$

である。

2.3 例

図 6 の故障密度関数 $f_1(t)$ と $f_2(t)$ を持つ部品を直列接続と並列接続した場合を考えよう。このときのシステム全体の信頼度、故障率、故障密度関数、平均寿命を求めよ。

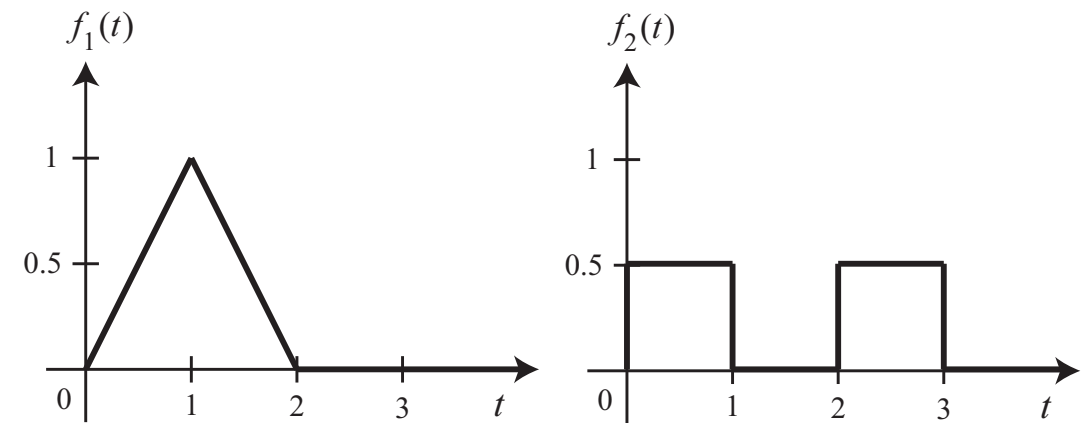


図 6: 例の部件の故障密度関数 $f_1(t)$ と $f_2(t)$.

最初に、部品 1, 2 の故障率 $P_1(t), P_2(t)$ と信頼度 $R_1(t), R_2(t)$ と平均寿命を求めよう。故障率は、

$$P_1(t) = \int_0^t f_1(s)ds = \begin{cases} t^2/2, & 0 \leq t \leq 1, \\ 1 - (t-2)^2/2, & 1 \leq t \leq 2, \\ 1, & 2 \leq t, \end{cases}$$

$$P_2(t) = \int_0^t f_2(s)ds = \begin{cases} t/2, & 0 \leq t \leq 1, \\ 1/2, & 1 \leq t \leq 2, \\ t/2 - 1/2, & 2 \leq t \leq 3, \\ 1, & 3 \leq t \end{cases}$$

なので、図 6 の故障密度関数を積分すると、図 7 を得る。信頼度は、

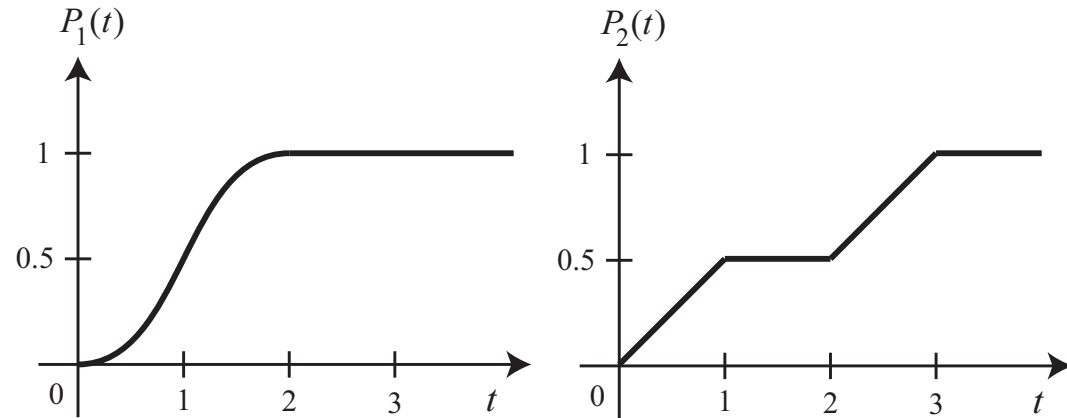


図 7: 例の部品の故障率 $P_1(t)$ と $P_2(t)$.

$$R_1(t) = 1 - P_1(t), \quad R_2(t) = 1 - P_2(t)$$

なので、グラフの概形は図 8 である。各部品の平均寿命は、

$$E[f_1] = \int_0^\infty t f_1(t) dt = \int_0^\infty R_1(t) dt = 1$$

$$E[f_2] = \int_0^\infty t f_2(t) dt = \int_0^\infty R_2(t) dt = 1.5$$

である。

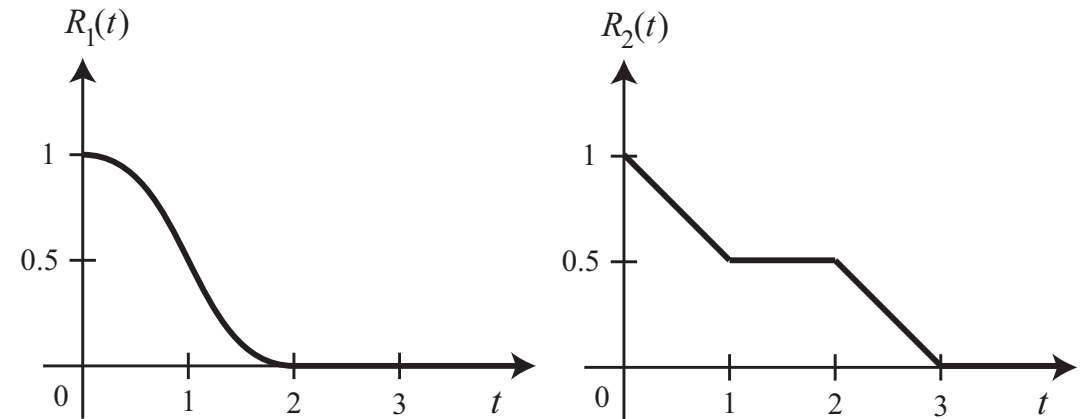


図 8: 例の部品の信頼度 $R_1(t)$ と $R_2(t)$.

2.3.1 直列接続

直列接続の場合のシステム全体の信頼度は $R(t) = R_1(t)R_2(t)$ なので、

$$R(t) = R_1(t)R_2(t) = \begin{cases} (1 - t^2/2)(1 - t/2), & 0 \leq t \leq 1, \\ (t-2)^2/4, & 1 \leq t \leq 2, \\ 0, & 2 \leq t. \end{cases}$$

$$= \begin{cases} t^3/4 - t^2/2 - t/2 + 1, & 0 \leq t \leq 1, \\ t^2/4 - t + 1, & 1 \leq t \leq 2, \\ 0, & 2 \leq t. \end{cases}$$

故障率は、

$$P(t) = 1 - R(t) = \begin{cases} -t^3/4 + t^2/2 + t/2, & 0 \leq t \leq 1, \\ -t^2/4 + t, & 1 \leq t \leq 2, \\ 1, & 2 \leq t. \end{cases}$$

故障密度関数は、

$$f(t) = \frac{d}{dt}P(t) = \begin{cases} -3t^2/4 + t + 1/2, & 0 \leq t \leq 1, \\ -t/2 + 1, & 1 \leq t \leq 2, \\ 0, & 2 \leq t. \end{cases}$$

平均寿命は,

$$\begin{aligned}
 E[f] &= \int_0^{\infty} R(t)dt \\
 &= \int_0^1 R(t)dt + \int_1^2 R(t)dt + \int_2^{\infty} R(t)dt \\
 &= \int_0^1 (t^3/4 - t^2/2 - t/2 + 1)dt + \int_1^2 (t^2/4 - t + 1)dt + \int_2^{\infty} 0dt \\
 &= [t^4/16 - t^3/6 - t^2/4 + t]_0^1 + [t^3/12 - t^2/2 + t]_1^2 \\
 &= 31/48 + 1/12 = 35/48
 \end{aligned}$$

である。平均寿命は、直列接続するとそれぞれの部品の平均寿命より短くなる。

2.3.2 並列接続

並列接続の場合には、システム全体の故障率は $P(t) = P_1(t)P_2(t)$ なので,

$$P(t) = P_1(t)P_2(t) = \begin{cases} t^3/4, & 0 \leq t \leq 1, \\ 1/2 - (t-2)^2/4, & 1 \leq t \leq 2, \\ t/2 - 1/2, & 2 \leq t \leq 3, \\ 1, & 3 \leq t. \end{cases}$$

故障密度関数 $f(t)$ は,

$$f(t) = \frac{d}{dt}P(t) = \begin{cases} 3t^2/4, & 0 \leq t \leq 1, \\ -(t-2)/2, & 1 \leq t \leq 2, \\ 1/2, & 2 \leq t \leq 3, \\ 0, & 3 \leq t. \end{cases}$$

システム全体の信頼度は $R(t) = 1 - P(t)$ であるから,

$$R(t) = 1 - P(t) = \begin{cases} 1 - t^3/4, & 0 \leq t \leq 1, \\ 1/2 + (t-2)^2/4, & 1 \leq t \leq 2, \\ 3/2 - t/2, & 2 \leq t \leq 3, \\ 0, & 3 \leq t. \end{cases}$$

平均寿命は

$$\begin{aligned}
 E[f] &= \int_0^{\infty} R(t)dt \\
 &= \int_0^1 R(t)dt + \int_1^2 R(t)dt + \int_2^3 R(t)dt + \int_3^{\infty} R(t)dt \\
 &= \int_0^1 (1 - t^3/4)dt + \int_1^2 (1/2 + (t-2)^2/4)dt + \int_2^3 (3/2 - t/2)dt + \int_3^{\infty} 0dt \\
 &= [t - t^4/16]_0^1 + [t/2 + (t-2)^3/12]_1^2 + [3t/2 - t^2/4]_2^3 \\
 &= 15/16 + [(1+0) - (1/2 - 1/12)] + [(9/2 - 9/4) - (3 - 1)] \\
 &= 15/16 + 7/12 + 1/4 = 85/48
 \end{aligned}$$

である。平均寿命は、並列接続するとそれぞれの部品の平均寿命より長くなる。